

草加を再発見するフリーペーパー

草生人

そうせいじん

草加とアート

インタビュー

彫刻家 麦倉忠彦さん

画家 鈴木喜美子さん

陶芸家 宮地陶博さん

人形師 野崎芳寿さん

元ギャラリー昴オーナー

加藤威さん

草加アートマップ

●そうか■まちだより●

都市農業フェスタ

「まちのトレジャーハンティング@そうか」

●草加イベントレポート●

2016年4月～2016年7月

2016/ 初秋

表紙写真：アコちゃん（麦倉忠彦 作）

数々の彫刻が草加のイメージを決定づけた

彫刻家

麦倉忠彦さん



1935年、草加市生まれ
1959年、東京芸術大学芸術学部彫刻科卒業
1961年、東京芸術大学研究科彫刻専攻修了 同大学研究室助手
1963年、アメリカ合衆国サウスダコタ州
K・ジョーロコフスキー彫刻研究所に留学
1963年、安宅賞・新制作協会新作家賞、新制作協会会員
(1999年に委員長)
その後、埼玉県美術家協会彫刻部参与
九州産業大学大学院教授、共立女子大学講師などを務めた

1

必ず裏側に回る彫刻家の癖

草加松原遊歩道の出発地点、ふだばかし 札場河岸公園に立つ「松尾芭蕉翁像」は、宿場町草加のシンボルと言ってもいい存在だ。

このブロンズ像は草加市生まれ草加市在住の彫刻家、麦倉忠彦さんによる作品だ。麦倉さんの彫刻作品は草加市内のいろいろなところに設置されていて、草加市の景観を支えている。

麦倉忠彦さんは、1935年11月20日、草加市稲荷町で生まれた。終戦を迎えた小学5年生ごろから絵に興味を持ちはじめ、中学生のころには「絵を描く職業についてみたい」という気持ちを抱き始めたという。

以後、埼玉県立春日部高校では美術部で「芸術三昧、美術三昧」の生活を送り、東京芸術大学では「彫刻家の一番の切り札」というデッサン力を磨き上げ、現在も数々の彫刻作品を生み出し続けている。

麦倉さんの生家は永禄8年（1565年）開山の寺院、慈尊院だ。お寺で生まれ育ったことは美術的感性に影響があるかお尋ねした。

「仏像は見るだけじゃなくて触ってほしい。掃除をしなくてはならないんで意識はないけど、今思つと影響を受けたのかなと思います」

こうして麦倉さんは彫刻家ならではの独特の「癖」を獲得した。

「私は職業的な癖として物の裏側も見ま

す。立体として見るんですね。必ずものの周りを一回りします」

振り返る松尾芭蕉像は草加でしかできないポーズ

松尾芭蕉の『奥の細道』には「その日やうやう草加といふ宿にたどり着きにけり」という記述がある。芭蕉は深川から千住まで舟で行き、そこから歩み始め、その日のうちに草加宿に到着した。

1989年（平成元年）が松尾芭蕉の奥の細道の旅立ち300周年だった。その節目に向けて、草加市では「奥の細道」をキーワードにした様々な事業が実施された。

市民団体「草心会」の呼びかけで「芭蕉像をつくる会」が組織され、麦倉忠彦さんに制作が依頼された。

準備期間は1年しかなかった。麦倉さんは急いで芭蕉について勉強して、自分なりにイメージを作った。

「資料を読むこともほかの人の作品を見ることも大切ですが、見過ぎたり読み過ぎたりすると誰かのコピーになる。アーティストがやってはいけない一番恥ずかしい行為は人の真似です」

だから「勉強はほどほどで、あとは感性で」イメージを描いていた。

そして草加市民に深く浸透した、あの芭蕉の風貌と佇まいが作り上げられた。旅装束の芭蕉は、足は前方に踏み出しながらも、首は後方を振り返っているのがある。

150日間に及ぶ「奥の細道」の旅の

1日目。千住宿から8.8km、日光街道第2の宿駅、草加にたどり着いたときは、芭蕉の心の中はまだ千住への名残惜しさが強かったはず。

「これはすぐひらめきました。草加のこの界限じゃないと出ない自然なポーズです。利根川の向こうに行ったらこのポーズはおかしい。草加のオリジナルです」

当時、麦倉さんは「芭蕉像をつくる会」の人たちといっしょに芭蕉の足跡をたどるバスツアーに参加した。

麦倉さんは芭蕉像の案のスケッチを持参した。自信作の振り向く芭蕉像と、もう一案用意していた。バスの中でみんなに見てもらい、アンケートを取った。

「これがいい！って、振り向く方の像が人気があつたんですよ」

ちなみに選に漏れた対抗案も、麦倉さんによると「ドラマチックな動きのある作品」とのこと。そのスケッチは今でも保存してあるそうだ。

20年を隔てて作り上げた河合曾良像

奥の細道で芭蕉に随行した河合曾良のブロンズ像が、芭蕉像から南60メートルほどのところの「おせん公園」内に設置されている。曾良は前を行く芭蕉に向かって手を差し出し、追いかけているような姿勢を取っている。空間を隔てて2人の関係が読み取れるような面白い構図だ。

だが、曾良像は空間だけでなく時間もまた隔てて芭蕉像を追いかけたのだった。曾良像の完成は芭蕉像が完成してか



ら20年も後のことだったのだ。

当初、芭蕉像と曾良像の2体を同時に作りたいという希望もあったという。だから芭蕉像が完成したあとも、市民団体「草心会」の人たちは曾良像を作る夢を捨てていなかった。

「20年間その情熱を暖めていた草心会と、代表の青柳優さんのエネルギーはすごいと思いますね」

だがいざ作るうとすると、麦倉さん自身にも苦勞があった。

「20年の隔たりが、作品の差として出ないようにする努力も大変だったんです」

芭蕉像を作ったときが50代。それから重ねてきた20年という歳月を埋めるため、麦倉さんは芭蕉像の原型を傍らに置いて、曾良像の制作を進めたという。

街に溶け込む彫刻、おせんさんとアコちゃん

草加駅東口の駅前広場に設置されたブロンズ像「おせんさん」と「アコちゃん」が一般的な彫刻と違うところは、見上げる位置にないことだ。

おせんさんは広場に面して左手側の、アコちゃんは右手側の屋根つきの休憩所に「ある」というより「いる」。

テーブルを囲んで複数設置された椅子の一つに座っているのだ。

草加で買い物などしてちよっと休憩、とその椅子に座ったときに、隣の人が銅像だったと知って驚く人もいる。また、おせんさんなどくに、なぜかよく触られる。幼児がおせんさんの両腕の間に入

り込んで抱っこされる様子を見かけたこともある。

アートを街に溶け込ませようというテーマがあるが、最大限に溶け込んでいる例がこれだと言えるのではないだろうか。

おせんさんという名前は、草加せんべいの伝説上の創始者「おせんばあさん」から採られた。座布団に正座して、草加せんべいならではの押し瓦と箸を使っている例がこれだと言えるのではないだろうか。おせんさんはおばあさんではなく若い女性だ。

「ジューパンはいた現代女性にしちゃった」と麦倉さんは言う。

そもそもどんな経緯でこの2作品が作られることになったのだろうか。

「草加駅前の開発計画の中で、その辺に置く彫刻を何か考えてください、という依頼があった」

そこからせんべいを焼く女性とせんべいをかじる少女、という草加ならではのモチーフを創出したのは麦倉さん自身なのだ。

ところで、おせんさんのモデルは麦倉さんの奥さんで、アコちゃんのモデルは姪御さんだという。そんなところも、この作品の実在感の要因なのかもしれない。

街角の彫刻に親しみをもち、そこから街への愛着をさらに深める。麦倉さんの彫刻作品は、草加に住む人や草加を訪れる人々の心をそななぶに変えてきたのではないだろうか。



草加市内で見られる麦倉彦彦さんの作品

『双葉』

草加商工会議所（1978年）

『松蔭の流れ』（写真③）

スポーツ健康都市記念体育館（1985年）

『緑の芽』（写真⑤）

稲荷コミュニティセンター（1985年）

『クローバー』

高砂小学校（1986年）

『松庵芭蕉翁像』（奥の細道旅立ち300年記念）

草加宿札場河岸公園（1989年）

『あしたを聴く』

草加駅改札口前（1990年）

『アコちゃん』（表紙）『おせんさん』（写真⑧）

草加駅前アコス広場（1991年）

『芽下美人』

草加市文化会館コミュニティ棟2F（1993年）

『日だまり』

草加市中央図書館（2000年）

『あやせの守』

金明通り（2004年）

『河合曾良像』（写真②）

神明1丁目おせん公園（2008年）

① 札場河岸公園にある松尾芭蕉翁像

② おせん公園にある河合曾良像

③ 『松蔭の流れ』

④ 『ノビタチチンダ』（この作品はもう1体の犬と対になっている）草彫展（2016年7月）にて

⑤ 稲荷コミュニティセンターにある『緑の芽』

⑥ 『sliced Apple』 草彫展（2016年7月）にて

⑦ 『深呼吸』 草彫展（2016年7月）にて

⑧ 『おせんさん』

画家 足尾を通して人間を表現する 鈴木喜美子さん



福島先生は今でも師です

草加市美術協会会長を務める画家、鈴木喜美子さんは草加市神明の商店街にある海産物店に生まれました。小学生時代からカメラに親しんできたが、高校卒業後、絵の道を目指そうと決意した。

そんなとき、新聞で産経学園（日本最初のカルチャースクール）の生徒募集という広告を発見した。油絵科、基礎科と書いてある。鈴木さんが訪ねて行くと、そこはお金持ちのご婦人ばかり。

そこに現れたのが福島誠先生だ。当時28歳で、美術団体「新制作協会」会員の

新進気鋭の画家である。

福島先生は鈴木さんを見て、「何しに来たの?」と尋ねた。

「美大受験の勉強をしに来ました」と鈴木さんは答えた。

「ここはそんなものをやるところじゃないよ!」

と、福島さんは名刺に自宅の住所と地図を描いて手渡した。

「明日デッサン2枚描いてこの家に来よう!」

こうして鈴木さんは福島先生に師事することになった。

「ずっと無料でした。プロになる人からお

1943 年、草加市生まれ
1961 年、福島誠氏（新制作協会）に師事
1981 年、「雪の足尾線」第1回日本画郎協会賞展奨励賞受賞
2000 年、新制作展 新作家賞受賞（同'01'03 年受賞）
2004 年、新制作協会 会員推挙
2005 年、国連本部（ニューヨーク）で個展を開催
2010 年、草加アコスホールで個展
草加市美術協会会長

1

金はもらわない、って先生はおっしゃったの」

もともと自宅が魚屋だったので、盆暮れは鮭1本や数の子などを贈ったという。

いつまで師事していたのだろうか。

「ずっと今でも師事してますよ。先生は変わらないです。師は師です」

福島先生の指導で美術を学び、武蔵野美術大学に入学した。

大学終了後は、地元草加や越谷の小学校の先生方に絵を教える仕事をした。当時小学校には美術専任の先生がいなくて、一般の大学や短大を卒業した先生がわけもわからず美術を教えていた。

「どうやって教えたり点数をつけていかもわからないと悩む、向学心に燃えた先生が多かった。それで私のところに来て勉強していました」

また、鈴木さんは当時フランス美術に傾倒していた。25歳のときにはフランスパリに留学した。セザンヌが大好きだったので、セザンヌを一生懸命研究した。

美術を教えたり絵を描いたりという、美術中心の生活を送っていたが、鈴木さん自身は中途半端さを感じていたようだ。

「周りにはみんな就職したりお嫁さんに行ったりしてるのに、私はブラブラしてた」

足尾との出会い

そんな生活が大きな変化を余儀なくされた。28歳の時、お父さんが大腸がんになったのだ。そして1年後にお父さんの

看病をしていたお母さんがクモ膜下出血で急逝した。さらに1年もしないうちにお父さんも亡くなった。

「真っ暗になっちゃった。それまで親がかりで生きてきましたから。それを支えてくれたのが、学校の先生たちでした」

1975年の夏休み、鈴木さんの教え子である学校の先生たちといっしょに、日光方面に写生旅行に行った。

写生に飽きたころ、ふと鈴木さんはこの山の後ろには何があるの? と一人に尋ねた。

『先生知らないの? 足尾銅山っていう、2年前に閉山した山があるんだ』って言うから、写生はやめて足尾銅山に行くことになったの」

始めて足尾銅山を見たときのことを、鈴木さんはよく覚えていた。

「工場が見えるところに引き込み線がある。その線路に立って見たんですよ。夕方4時ごろで、西日が当たった光景はもう言葉にならないくらい衝撃的。私に向かって山と工場がウワーッと迫ってきた」

その日はスケッチもせずに帰った。鈴木さんはそのときはまだ足尾銅山について、何も知らなかった。

足尾銅山は江戸時代に開発された鉱山だ。明治から昭和前期にかけて日本最大の銅産出量を誇り、日本の近代産業の発展に大きく貢献した。だが栄光の陰で、大気汚染や森林の荒廃、渡良瀬川の流域の洪水、水質・土壌汚染などの公害問題が起こった。

- ① 2016年5月にギャラリー恵風（越谷市）で開催された『鈴木喜美子展一足尾だよりー』にて
 ② 足尾をテーマにした最初の作品『雪の足尾』（1981年）。草加市中央公民館2階に展示されている
 ③④ ギャラリー恵風「鈴木喜美子展一足尾だよりー」
 ⑤ 自宅敷地内に建設中の個人美術館「ミュゼ環」にて



そして足尾銅山は1975年に閉山した。だが公害の被害者への補償や環境の回復など、問題は多く残った。現在、足尾地区の森林は植林運動が進み、少しずつ緑が戻っている。

福島先生の助言を受けて心が動いた

鈴木さんが二度目に足尾銅山を訪ねたのは2、3ヶ月後だった。

「すこし気持ちが落ち着いてから、あれは何だったんだろう、って気になって足尾に行きました。ただし、まだスケッチはせずに写真を撮って帰ってきたんですよ」

撮った写真を福島先生に見せた。

「きみちゃん、ここなかなかいい場所だね。合ってるんじゃないの？」と先生は言ったという。

「え？」と聞き返す鈴木さんに、「だってちゃんと気持ちが出てる写真だよ。ここいいと思うよ。描いてごらん」と福島先生は告げたのだった。

鈴木さんは心が動いた。「描こう！」と思った。

それから鈴木さんは毎週、足尾に行くようになった。そこがどういう場所なのか、そこに住む人がどういう生活をして、どういう考えを持っているのかを知るために。

「朝5時に起きて、雨だろうが雪だろうが通いました」

やがて鈴木さんは、足尾銅山を描いた大きな絵画作品を次と制作し発表していった。作品は高い評価を得て、数々の

賞を受賞した。

2005年にはニューヨークの国連本部で個展を開催する栄誉を得た。

「鈴木喜美子氏は、20年以上に亘り足尾銅山を描くことを通じ自然破壊について警笛を発し続けてこられました。中略」

鈴木氏の絵画を通じたこの問題に対する取組に敬意を表すると共に、今後のご活躍を期待いたします」（国際連合日本政府代表部公式サイト。絵画展での北岡大使によるオープニング・レセプション挨拶より）

足尾が呼んでいるから

なぜ続けられるのだろうか。それはひとつには人のつながりがあるからだ。

「最初に行ったとき靴屋のおじさんと出会いました。冬に普通の靴を履いていたら、そんな靴じゃだめだ、うちの長靴買え、って」

以来、足尾に行くたびにその靴屋さんを訪ねた。彼はいろいろな場所やいろいろな人を紹介してくれた。

知人は大勢にふくらんだ。旅館のおかみさん、和尚さん、町長、カメラマンなど。古河機械金属（旧古河鉱業）足尾事業所の方とお話をする機会を持つことができ、工場内に入れていただけた。

続けられる理由のもうひとつは足尾が呼んでいるから。

1作描くのに1年を要するという大プロジェクト。新たなテーマはどのように決めるのだろうか。

「向こうへ着くと、『描いてくれ』って山々



や工場の跡地が言っんですよ。『俺はこっちだ！ 描いてくれ！』って。そういうふうに声が聴こえるまでに時間がかかりましたよ」

北風に震える岩の悲鳴や、水の声、鳥や風の声……。自然、万物の声が聞こえる。

「あるときは赤い残留物や昔のタンクが『俺たちを描いてくれよ、描くときは灯りをとってくれ』ってヒントを教えてくださいるんですよ」

足尾という場を借りて人間を表している

閉山後まもなくの足尾とともに、鈴木さんは40年間歩んできた。その間に足尾は少しずつ変わってきている。

「私も同じように変わってきてるんじゃないかな。いっしょに成長もしたし、悲しみも味わってきた」

鈴木さんは人々に何を伝えたいのだろうか。

「私は足尾という場を借りて人間を表しているんです。人間の愚かさとか生き様とか。足尾だって復活する。人間だっていやなことばかりじゃないだろう、めげないでガンバレよって」

鈴木さんは今、草加市神明の自宅を建て替え、個人美術館を建設中だ。

「ミュゼ環」という名称で、10月にはオープンする予定です。自分の絵だけじゃなくて草加の人たちとか、私がお世話になった先生の絵もときには飾って、みなさんに見ていただきたいです」

陶芸家 宮地陶博さん



1949年、東京都墨田区生まれ。
1984年、自宅に窯を築く。
1987年、松井康成氏に師事。
伝統工芸新作展、第1回茶の湯の現代一用と形一などで受賞。
日本工芸会正会員、埼玉県美術家協会会員、草加市美術家協会会員。

人間国宝松井康成氏に師事

宮地陶博さんは草加市遊馬町在住の陶芸家。現在67歳だが、51歳まで小学校教員を勤めながら陶芸の作家活動をしていた。小学校では当初は理科の専科教員だった。

「ある日図工の先生がろくろを回していました。やってみないかって言われたから、じゃあお願いしますって教えてもらった。それが最初でした。飲みに行こうよって誘われた感じ。それでろくろを回してみたらこれはいい、家でやってみようと思って、さっそく自宅に窯を作りました」
それが34歳ぐらいのことだった。始まりはたまたまたった。

もうひとつの「たまたま」は、奥さんのお母さんが茨城県笠間市出身だったことだ。笠間市は焼き物に適した土に恵まれ、江戸時代から笠間焼きが有名だった。現在では多くの陶芸作家や窯元を抱える大きな窯業産地となっている。

お義母さんの実家では、陶芸の粘土を馬に載せてある陶芸家の家に届けていたことがあったという。

陶芸を始めて数年の宮地さんは、そろそろ誰か先生に師事したいと思っていたところだったので、その陶芸家に会ってみたいと思った。そして「そこに連れて行ってください」と気軽に頼んだ。

その陶芸家は松井康成氏だった。人間国宝だ。様々な色の土を練り合わせ積み重ねて多彩な文様を作り出す「練上手」という技法を極めるなど、陶芸の表現力を拡大してきた偉大な陶芸家だ。

宮地さんが始めてお会いしたとき、松井氏は人間国宝になる数年前だった。

よくぞそれほどの方がまだまだ初心者だった宮地さんを受け入れたものだ、と感心する。

「お坊さんだから受け入れないってことはないんだよ、って言われました」

実は松井氏はお寺の住職でもあった。

松井康成氏に師事したことによって、宮地さんの作陶技術は目覚ましく向上した。「師に迷惑をかけちゃいけないっていう気持ちで働くんですね」

こうして宮地さんの陶芸に対する姿勢が真剣味を増していった。

変化をあらかじめ想定する

宮地さんが陶芸を始めた時期は決して早くはなかったが、またたく間にさまざまな展覧会に入選し、個展を開くようになった。もともと美術的な才能があったのだから。

「それは違いますね。自分は美術っていうよりも科学が好きで、科学者になりたかったから」

宮地さんによると陶芸は科学の要素が大きいと言っ。

「美と科学の割合は自分としては2対8ぐらいだと思えますね」

作りたいデザイン、形や色の組み合わせのアイデアから制作に入るのは、彫刻などの美術と同じだ。しかしそこから制作に入ると、陶芸はあらゆる場面で科学的な過程に直面する。

「たとえば球形のものを作るとします。その

ためには最初は若干、5パーセントほど縦に長細く作るんです。すると柔らかいものなので重力で縦が縮むんですよ」

そこから1か月ぐらいかけて乾燥させる。粘土中の水分が蒸発すると約8パーセント小さくなるという。さらにそれを1200度で焼くと一部の鉱物が溶け、ここでまた7パーセント縮む。合わせて15パーセントもの収縮が起こるのだ。色も大きく変化する。宮地さんは、そのような変化をあらかじめ厳密に想定している。変化こそ陶芸だから。

技法へのこだわり

宮地さんは「技法」にこだわる。あらゆる作品は高度に洗練された数々の「技法」の集大成でもある。宮地さんは常に新しい技法を開発し、極めようと工夫を凝らし技術を磨いている。

主な技法について、宮地さん自身に説明していただいた。

彩泥

「彩泥」という技法がある。形ができあがった器に彩色された液状の土を塗って文様を作る方法だ。

「白い泥に顔料を入れて色を出したものが彩泥。我々がやり出してから、最近の展覧会ですごく多くなった。失敗が少ない技法なんですよ」

さらに宮地作品ならではの特徴として、縦や横や斜めに細い縞模様を描かれているものがあるが、このような文様は「彩泥」の応用で作られる。

では縞模様はどのように描くのかという



と……。まず1.5ミリほどの細い幅でカットした無数の和紙のテープを、乾く前の器の表面にびっしり貼る。そしてその上から彩泥を施す。出す色の数だけこの工程を繰り返す。彩泥が済んだら和紙テープを全部はがす。はがしたあとには下地の色が出てくるので、緻密な下地の色の線が浮き上がってくるのである。

それにしても、細い和紙を延々と貼っていく作業はたいへんに細かくて根気のいる作業だ。つくづく陶芸は職人仕事だと思わされる場面である。

モアレ模様

器の表面に、細い縞模様とともに淡く太い曲線や、円環、波などの大きな模様が浮かんでいる作品も目につく。だがよく見てみると、実は大きな模様は直接は描かれていない。直接描かれているのは細い直線や曲線だけ。いったいどうして大きな模様が目に見えるのだろうか。

縦の縞模様と斜めの縞模様が交わるときに、それぞれの規則性のズレが干渉しあって別の縞模様が浮かび上がってくる現象がある。これは「モアレ」という視覚現象である。宮地さんはモアレを意図的に発生させている。

「モアレ模様は、要するに交差した点が視覚的に結ばれて作られているんです。僕は三角形のモアレを出したいと思つたらこことこの点を結んでやればいい、ってわかるんですよ。自分ではわかってるんだけど、人に教えてもわからないんです」

「偶然から発展した」というモアレ模様は、宮地さん独自の技法だ。モアレによって

器の表面が動いているような錯覚も感じることがある。トリックアートのような手法である。

粒穴

表面の質感が複雑な器がある。いろいろなものを連想する。パイナップル、メロン、サンゴ、フジツボ、苔むす岩石……。生物や植物を思わせるこの独特の質感の秘密は、間近でよく見ると判明する。表面にびっしりと小さな穴があるのだ。

この技法を「粒穴^{リゅうけつ}」という。粒穴はさまざまな効果を生む。

「表面に塗った彩泥を針で刺すことで下に潜り込ませて、しっかりと留める効果がある。そして雰囲気がかく見えろという視覚的な効果もあります。あと熱いもの入れたときに触っても熱さを感じません。空気の層ができているから」

風化

「風化」という技法もある。

極細の和紙を貼ってマスキングした上で、コンプレッサで砂を吹き付けて表面を削るのだ。さらにでき上がったものを炭で焼き、炭化も施すという。すると砂漠に数万年放置された器のような表情が一気に出現する。

「これは、作品はこの先はどうなっていくんだろって思わせるように作ったんです」

見つめているうちに風化はさらに進行し、朽ち果てそうな気がしてくる。「風化」という技法は「時間」を考えさせる。

「科学が8割」と宮地さんは言っていたが、哲学もかなり占めるのではないだろうか。工房の棚には宮地さんの作品が所狭しと

置かれていた。大きな地震があったら間違

いなく落下して割れるだろう。

「2011年の震災でだいぶ壊れたんですよ。でも大丈夫です。元々作品は壊れるものですからね。それより次の作品を作りたい。作り続けることが生きてる証ではないですか」

- ① 工房の棚には作品がびっしり陳列されている。
- ② 自宅の展示スペース「ギャラリー陶 HAKU」に置かれた作品。
左手前の器の表面に太い波線が見えるがこれはモアレ模様。
- ③ 皿の底面が波打っているように見えるがこれは視覚トリックで、実際には平らである。反対側から見ると丘の連なりに見える。
- ④ 「彩泥」について説明する宮地さん。
- ⑤ 「粒穴」の技法を活かした作品。
- ⑥ 竹の模様をテーマにした作品。
- ⑦ 「風化」を表現した『彩泥風化層文花器』。

草加市美術協会展（2016年3月）にて。



人形師

ほうじゅ

野崎芳寿さん

一貫した人形作りを目指して修行

草加市神明に人形師、野崎芳寿さんのご自宅と工房がある。

そのご自宅に開設された展示スペース「ギャラリー創心」では、季節ごとに「市松抱き人形」や創作人形の展示会が開かれる。

市松抱き人形は江戸時代から伝わる伝統工芸で、その技法を受け継いでいる人形師は、現在は全国に10人いないのではないかとされている。

そのうちの1人が野崎芳寿さんだ。

1949年、草加市生まれ
1964年、父、野崎芳四郎氏に人形の生地作りを学ぶ
1965年、東京の人形師、中森克政氏に師事する
1982年、三つ折れ人形の研究・製作を始める
1986年、「芳寿作 木彫三つ折れ人形展」を銀座・ワコール銀座アートスペースで開催
1998年、ハイビジョンテレビ「業人」出演

野崎さんのお父さん野崎芳四郎さんは人形の生地を作る仕事をしていて、「私の父親は、桐塑を女型に入れて、同じ大きさの人形の生地を作り出す。そういう仕事をしてたんです」

桐塑というのは、桐の粉末に生糶糊という糊を混ぜて粘土状にしたものだ。人形の生地とはつまり桐塑を型で抜いて量産した人形の部品、すなわちまだ表情のない人形の頭部、胴体、手足のこと。これらは次に頭師のもとに納められる。

頭師は、人形に目を作り、肉付けし、

髪の毛をつけるなどして、仕上げていく。野崎さんは中学を卒業したら、すぐにお父さんのもとでこの人形の生地作りを学び始めた。

「家業を継ぐということは子供のころから決めていました」

そして翌年、16歳のとき、ある人形師のもとに行った。

「生地師だけでなく仕上げも習って、一貫した人形作りができるようにと修行に出たんですよ」

おまえにこれを教えたら俺はいつでも死んでいい

野崎さんが師事したのは、東京の人形師、中森克政氏だった。

中森氏の人形師としての系統は、江戸時代に京都出身で江戸幕府の御用を勤めていた人形師、雛屋次郎左衛門まで遡る。その弟子筋には、昭和初期の「答礼人形」(※1)で高名な二代目光龍齋がいる。

そんな輝かしい人形師系統図の最後に中森克政氏とその弟子、野崎芳寿さんが加わっている。

野崎さんが中森氏のもとに通った期間は2年ほどで終わった。中森氏が体を壊してしまっただからだ。それからは独学である。ただ、疑問があるときは、随時道具を持って北千住の先生のお住まいを訪ねたという。

「病床で臥せっていたんですが、要所要所は教えてくださいました」

あるとき、どうしてもわからない問題について聞きに行ったとき、中森氏

は「よくおまえ、来たな」と言っただけ。そして「おまえにこれを教えたら俺はいつでも死んでいい」と告げた。

自発的に修行を進めていく途中で疑問にぶつかったときこそ、本物の業を身に付ける機会だということかもしれない。「それから1ヶ月ぐらいですよ、先生が亡くなったのは」

市松抱き人形は教育の道具だった

野崎さんが作っている人形は市松抱き人形といって、飾るだけでなく、子供が着せ替えをして遊ぶために江戸時代から親しまれてきた人形だ。

「ある意味、子供に対する教育の道具でもあったんですよ。将来結婚して子供ができたときに備えて、人形で疑似体験しておくわけですね」

昔の少女たちは、人形を抱っこしたりおんぶしたり着物を縫ってあげたりして、お嫁に行く準備をしたという。

野崎さんの業績のひとつに、「三つ折れ人形」を復活させたことが挙げられる。三つ折れ人形とは、足の付け根、ひざ、足首の3箇所が折り曲げられるように細工が施され、正座の姿勢が取れる人形のこと。江戸時代に京都の人形師が作り始め、高級品とされたという。人形がちよ

こんと座った姿はひとときかわいいう。正座という日本の豊文化から生まれた日本独自の人形です。これは、大正時代にもう作る人がなくなっちゃったんですよ。面倒でしょ。生産性がよくないんですよ」

※1 答礼人形：昭和初期、日米間で政治的緊張が高まったため、アメリカの宣教師らが、平和の親善大使として「青い目の人形」1万3000体余りを日本の小学校や幼稚園に贈った。その返礼として、日本から職人たちが作った「答礼人形」と呼ばれる市松人形をアメリカ各州に1体ずつ贈った。

- ① 身長8センチの豆三つ折れ人形。
- ② 30年以上前に作った木彫三つ折れ人形（全身・顔部分）。まつげと歯があるのがわかる。
- ③ 独特の雰囲気をもつ創作三つ折れ人形。
- ④ 魚取りの思い出に想を得た創作人形。
- ⑤ 子犬と幼児のにらめこの場面を描いた創作人形。
- ⑥ セタをイメージした創作人形。



「たまたま知人から話があって、面白そうだなと調べ始めた。」

「古い文献を見たり、江戸時代の展示を見ては何体か作ってみて、銀座で初めて個展開いたんですよ」

今では三つ折れ人形と言えば野崎芳寿、というほど有名になった。

300年の時を越えて残る人形

市松抱き人形の江戸時代から伝わる伝統的な制作方法には、数多くの工程がある。野崎さんは全工程をひとりで行っている。簡単に工程を挙げると以下のようなになる。

まず桐の木を彫って人形の原型を作る。ところから始まる。その原型から型を作る。

型を使って、桐塑による人形の生地を作る。眼のくぼみに義眼を入れる。

膠で溶いた胡粉（貝殻から作られた粉）を使って、眼や小鼻、唇の膨らみを作る。胡粉を何度も塗っては磨く。

刃物で目を切り開く。一番重要な仕事だ。目にいちばん人形師の特徴が出るという。

顔や手足の細かい部分を彫り込む。肌の表面を仕上げる。

面相筆で1本1本睫毛や眉毛を描く。人毛で髪の毛をつける。

着物は正装か昭和初期ぐらいの古い縮緬を使っている。質感が違ってくるからだ。

「私が魅了されている人形はやっぱ江戸時代のもんです。やっぱりすごいなと思いますよ。2000年300年の時を越

えて残っているんですから」

野崎さんは「自分の作品を後世に残したい」という思いを強く抱いている。そして江戸時代以来の材料と技法を使い、これから2000年、3000年の未来に、野崎芳寿人形と人形文化は継承されるだろう。

人形は人を癒すもの

人形師によって人形の顔はみんな違う。その中でも野崎さんが作る人形には、目や口の小ささ、頬の膨らみなどの絶妙なバランスから創り出された、幼子のあじけない表情がある。そこに誰もが本能的に惹きつけられるだろう。

また野崎さんは型にとらわれない自由な発想の「創作人形」にも力を入れている。幼子が犬とにらめっこをしている人形など、全身からかわいさが滲み出ている。

こんなにかわいい人形を作る野崎さん

だが、もともとそれほど人形は好きではなかったという。

「やっぱり男ですから。壁はいつぱいありましたよ。それでも人形って何なんだろうという疑問を持ち、好きになる努力をしました。せっかくこういう道に入っただから中途半端じゃ終わりにたくないね。要するに自分探しですよ」

人形は芸術なのだろうか。そして自己表現の要素はあるのだろうか、という疑問を投げしてみた。

「根本的に人形は人を癒やすものだと思います。だからそこに自分の思いや心映みしたいものは出してくれない。素直な白い部分で人形に向かっけ行きたいです」

かつての草加と自分の記憶という土壌

インタビュが終わってから、野崎さんが1冊の大型本を持ってきた。『写真アルバム 草加・八潮・三郷の昭和（いき出版）』という、今年の2月に発売された写真集だ。

野崎さんが開いたのはその本の244ページ。そこには路地で子供が遊んでいる写真が掲載されていた。

「これ、私なんです」

なんと場所は野崎家のすぐそばの道だった。時代は昭和30年代。正面奥に東福寺の特徴的な屋根が見える。ご近所の方が撮った写真だ。

その当時のことを野崎さんはよく覚えている。

幼児が遊ぶ姿の創作人形を発想できるのは、かつての草加と自分の記憶という豊かな土壌があるからこそなのかもしれない。



ここには美術のコミュニティがあった

草加駅西口徒歩2、3分のところで24年間運営し続けていたギャラリーが、今年閉廊した。草加の高名な画家や彫刻家たちも、絵の勉強に励む市民画家たちも、みなここで作品を発表した。草加の街に溶け込み、草加の美術界を支えてきたギャラリーだった。

元ギャラリー^{すばる}昂^{たけし}オーナー 加藤威さん

最後の展示会

2016年4月30日、24年間草加の美術界を支えてきたギャラリー^{すばる}昂^{たけし}が閉廊した。

最後の展示会は、加藤威^{たけし}社長の奥様八千代さんの個展だった。銀座で創業してから30年間、夫婦で力を合わせて続けてきたギャラリー昂^{たけし}の最後を飾るのにふさわしい作品が、壁を彩っていた。

次々と友人たちが訪れては加藤さん夫婦の労をねぎらい、室内は会話と笑顔があふれていた。

実業家から画廊経営へ転身

ギャラリー昂^{たけし}の加藤社長は、美術専門学校の講師や、ヨーロッパの有名ブランドと提携したデザイン事務所「デザイン・ボハラ」の経営などで、実業の第一線で活躍する日々を送っていた。

そこから直接美術と関わる仕事をしたいと転身を図り、1987年、50歳のとき、ギャラリー昂^{たけし}を日本の美術の中心地、銀座に設立した。だが7年近く画廊を経営したところで、銀座を引き払ってギャ



ラリーから撤退しようと思った。体をこわしたことがきっかけだった。ちょうどそのタイミングで、草加に新しいビルを作ったデザイナーの友人から声がかかった。『草加に画廊がないからやってみないか』と言われてね。縁ですね』

ギャラリーは畑仕事

草加駅西口から徒歩2、3分の近さ。コンクリートがむき出しの壁面から構造体が突き出す



インパクトの強い建築物。加藤さんはその2階にギャラリー昂^{たけし}を構えることになった。

銀座のよさがあるけれど、地方には地域に密着するギャラリーが絶対必要だ。そう考えてこの画廊を始めることにしました。

銀座から育つていった銅版画家、高野玲子さんが絵を描いた、宮沢賢治の童話『どんぐりと山猫』の原画展で画廊をオープンした。

最初は苦労した。ギャラリーそのものが地域に理解されなかったのだ。

「畑仕事だよこの仕事は、と師から言われました。それほどたいへんなことなんだよって」

画廊の仕事とは、種を蒔いて育てて

根付くまでにひと季節必要な、なかなか成果の出ない仕事なのだ。

やがてギャラリー昂^{たけし}は、麦倉忠彦さん、鈴木喜美子さん、宮地陶博さんなど、第一線のアーティストたちの展示会が開かれる、草加市を代表する画廊として知られるようになった。

そして、趣味で絵画や写真や工芸を楽しむアマチュアのアーティストたちにとっても、作品が発表できる場所になった。とくに市内の美術教室のために作品発表の場を提供することに力を入れた。

「地方では教室展をやるが必要なんですよ。知り合いたちも来るでしょ。だから美術の裾野を広げるにはいちばんいい方法だった」と加藤さん。

昂^{たけし}で発表することが美術教室の生徒たちの目標になったわけだ。

「みなさん、来年はもっと頑張らんくちや、ってどんどん上達していくんです」

ギャラリー昂^{たけし}が草加市民の美術レベルの向上に貢献した部分は確実にあるだろう。

銀座から30年間、草加で24年間、ギャラリーではずっと1週間単位の個展や企画展、グループ展を開いてきた。ここで

作品を発表したアーティストは、単純計算で延べ4000人を超えるだろう。

合縁奇縁を大切に

ギャラリー昂^{たけし}はアーティストたち、美術愛好家たちが集う場所だった。ふらつと顔を出す、いつも誰かの個展がグループ展が開催されていた。いつも加藤さんと八千代さん、そして友人たちがいた。

「ここには美術を中心としたコミュニティがありました。合縁奇縁の不思議な縁を大切に、親交を深めてきました。

万感の思いがありますが、独立してデザイン・ボハラを設立して50年、ギャラリー昂^{たけし}で30年という区切りよい節目である今、余力を残して幕を閉じることにしました」

ギャラリーは閉じたが、ずっと続けてきた摘草の会（アコースホール会議室）と、かりんの会（中央公民館）という2つの絵画教室での指導は継続する。

ギャラリー昂^{たけし}が蒔いた種はどこまで育つたのだろうか。実をつけ収穫する役割は次の世代に託されたのかもしれない。



- ① 奥様の加藤八千代さんと。
- ② 加藤さんはEBアートの作品を多く手がけていた。（※1）
- ③ 外階段から2階にある「ギャラリー昂」の扉を見上げる。
- ④ 加藤八千代さんの個展の様子。
- ⑤ 開廊20周年パーティーの写真。

※1 EBアート：石膏板に絵の具で絵を描き、その上から樹脂をかけて光（エレクトロビーム）を照射する画法。表面に光沢が生まれ色彩が鮮やかになる。EBはエレクトロビームの略。

草加アートマップ

草加駅～ ふだばかり 札幌河岸公園 周辺

おせん公園



『河合曾良像』(麦倉忠彦)

恒例の「マップ」、今回は草加市内に設置・展示されている主な彫刻、絵画などの美術作品やモニュメント、そしてギャラリーや展示施設の場所を記しました。「草加アートめぐり」にぜひ役立ててください。

札幌河岸公園



『松尾芭蕉翁像』(麦倉忠彦)

草加市中央公民館

外壁



「中央公民館壁画」(米重忠夫)

エントランス



壁画の原画 (米重忠夫)

1 階ロビー



『想』(米重忠夫)

2 階ロビー



『雪の足尾』(鈴木喜美子)

草加商工会議所



『双葉』(麦倉忠彦)

高砂小学校中庭



『クローバー』(麦倉忠彦)



『草加石清水』



『草加石清水』

草加駅東口駅前広場南側



『アコちゃん』(麦倉忠彦)

草加駅東口駅前広場北側



『おせんさん』(麦倉忠彦)

草加駅改札前



『あしたを聴く』(麦倉忠彦)

作品のある場所

『作品名』(作家名)
敬称略

神明庵：
2階にギャラリーがあり、市民の絵画や書道、写真の個展、グループ展が開かれる。

神明庵

ミューゼ環
(鈴木喜美子個人美術館)
※今秋開館予定

東福寺本堂内外陣境彫刻欄間
(草加市指定有形文化財)

歴史民俗資料館

歴史民俗資料館：
郷土の歴史資料や民俗資料を展示。

草加市中央公民館：
西の外壁に日本画家米重忠夫さんの巨大な壁画がはめこまれている。1階ロビーでは、しばしば絵画展や写真展などが開催される。

アコスホール・アコスギャラリー：
アコス南館(イトーヨーカドー草加店)の7階にホール、6階にギャラリーと会議室がある。6階のフロアは展示スペース「ガレリアアゴラ」となっている。ホールでは毎年10月に草加市美術展が開かれるなど、様々な美術展やイベントが開かれる。

アコスホール

草加市役所

高砂小学校

草加小学校

草加中学校

草加駅

草加マルイ

草加市中央公民館

トマップ

松原団地駅 周辺

作品のある場所
『作品名』(作家名 敬称略)

松原団地西愚痴公園

『平和母子像』(大和作内)

松原団地西口公園

『風見』(伊藤降道)

草加松原遊歩道北端

『水環』(三澤憲司)

冒険遊び場

『二頭の馬』(作者不明)

『めばえ』(左欣司)

草加市立病院

『春を奏でる』(中村晋也)

草加市立中央図書館入り口

『日だまり』(麦倉忠彦)

草加市文化会館駐車場入り口

『風の音色』(サトル・タカダ)

草加市文化会館 2 階ロビー

『芽下美人』(麦倉忠彦)

草加市文化会館：
市内著名芸術家の作品が展示されているほか、フリースペースは市民による展示会やグループ展に利用されている。

アートフェリス

アートフェリス
(映像美術館/特別養護老人ホーム)：
老人ホームの建物内廊下にて映像が展示できるようになっている。最上階の「地域交流室」では、映像イベントなどを開催。

『和音』(上田奈緒子)
協力：押田染工場、そうか草職人会

おもてなし宣言
無料休憩所
草加宿

神相庵

旧日光街道沿い。
名勝「草加松原」の散策の起点として
ご利用下さい。

★美味しいお茶でおもてなし
★2階はギャラリーになっています

開館時間
11時～16時
月曜休館
(祝日の場合は翌日)

〒340-0012
草加市神明 1-6-14
048-948-6882
info@shinmeian.com

和食処 TAIRA

平

落ち着いた空間で繊細な旬の味覚をご堪能ください

平コース
お造り御膳
魚煮付け御膳
ステーキ御膳
日本酒・焼酎・ワイン各種

18:00～23:00 ラストオーダー 22:00 水曜日定休
ご予約承ります ☎ 048-944-1130

草加 2-20-13 (草加市立病院東側)

炭火煎珈琲 茶房

采

美味しい珈琲で
くつろぎのひとときを

人気の自家製かぼちゃプリン

平日・土曜 9:00～19:00 日曜・祝日 10:00～19:00
ラストオーダー 18:00 水曜日定休

☎ 048-944-1130 <http://sabo-taira.jp/>

草加アー

その他 (市内全域)

金明通り



『あやせの守』(麦倉忠彦)

宝積寺 (ほうしゃくじ)



『木造千体地藏』

宝積寺『木造千体地藏』：
草加市指定有形文化財。お盆・
お彼岸など、年に数回公開さ
れている。

そうか公園

そうか公園自由広場



オイルポンプのモニュメント
(アメリカ カーソン市からの寄贈)

草加バイパス高架下



『夢をのせて』
(長栄小学校・新田中学校)

新田駅

『三覚院本堂格間板絵』

『三覚院本堂格間板絵』
埼玉県指定有形文化財 (絵画)
現在は公開されていない。

東京外環道高架下



『壁画』
(原画：新田中学校美術部)

ギャラリー五恵夢

原町コミュニティセンター



『獣遊図』(小浜喜平治)

新里文化センター図書室



『彩泥干涉文壺』(宮地陶博)

市内の各小中学校には、
宮地陶博氏の作品が寄贈
されているとのこと。

西町小学校

草加駅

谷塚駅東口ロータリー内



『循環』

稲荷コミュニティセンター



『緑の芽』(麦倉忠彦)

スポーツ健康都市記念体育館エントランス



『松蔭の流れ』(麦倉忠彦)

草加バイパス高架下



『壁画』(谷塚中学校美術部)

草加生まれの世界で唯一のロボットエンターテインメントショー

ロボットプロレス「できんのか！」

in 草加商工会議所まつり

11月3日(木/祝)

綾瀬川左岸広場 開始14:30~

開催決定!



そうか ■ まちだより

6月に開催された「都市農業フェア」と、「トレジャーハンティング@そうか」についてのレポート。双方を管轄している草加市産業振興課課長 高橋浩志郎氏にもお話をうかがいました。

まちなか農業に注目！ 草加都市農業フェア

6月5日、中央防災広場で「草加都市農業フェア」が開催された。草加市内で採れた新鮮野菜の直売と、農産物のグルメ販売などがメインだが、給食試食コーナーや、都市農業や食育に関する啓発コーナーもある、いわば「都市農業の紹介」がテーマのイベントだ。

「都市農業を知ろう」というとちよつとつづきにくい気がするが、要するに「地場野菜をもっと食べよう（地産地消）」ということだ。

農業のお祭りといえば12月に行われる「農業祭」が有名だが、こちらは市内農家による品評会がメインであり、ユーザーにとっては、出品された野菜（つまり質のいい野菜）がお得に買える「即売会」の面が強い。

対してこちらは、市民に「都市農業」を知ってもらおうという、啓発のイベントだ。家族みんなで来てもらいたいというので、SLや遊具も用意されていた。

街中に農地があることの利点は多々ある。

まず、「地産地消」の面。近くで採れるので新鮮な旬のものであること。そして、「顔が見える農産物」として「安心・安全」であること。学校給食ですぐに地元野菜がけつ



こう使われている。「草加の枝豆」は市内の飲食店でも注目品になっている。

「市民の暮らしを考えたときに、顔の見える農産物の見える農産物、安心安全の農産物が地元でとれて、新鮮なおいしいものが食べられる、これほど豊かなものってないですね」（高橋さん）

「まちのトレジャーハンティング@そうか」と「リノベーションまちづくり」

6月25日、草加市内を10人近い怪しげな（？）大人の団体が4つ、うろろろしていた。これは、草加市が開催した「まちのトレジャーハンティング@そうか」（以下「トレハン」という、「まちの資源」を見つめ、それをどのように利用するかアイデアを出し合い、構想をまとめて発表するというイベントの1日目だ。会場は草加小学校の体育館。

草加市では、平成27年度から、空き店舗や空き家などを利用し、民間の力で再開発しようとする「そうかりノベーションまちづくり」を進めている（※1）。その活動の一環として行われたのが、「トレハン」だ。

今回筆者は、『タウン誌「草生人」を作っている人』として参加した。「草加市の隠れたお宝探し」というテーマはそのまま「草生人」の追いかけているテーマでもあるからだ。

なかなかへビーな体験だった。2日間で草加市に眠る「お宝」を見つけ、その活用を考えまともにプレゼンまでやっていかなくてはならない。

参加者はA B C Dの4つのグループ（ユニット）に分かれ、それぞれ別の地域を担当。私はユニットCで、担当地区は草加駅西口周辺。

ユニットのメンバーをまとめた「トレジャーハンター（ユニットのリーダー）」は、さまざままちの活性化事業に関わってきたいわばまちおこしの「専門家」（※2）。ユニットCを担当した石神夏希さんは劇作家で、メンバーの意見をまとめ



町をうろつくメンバー。大学生も参加。



いろいろな意見を出し合ってプレゼンをまとめる。

つ、プレゼン用ミニドラマの脚本をあつという間に書きあげた。ぐいぐい作業が進んで行くのはとても気持ちのいい体験だった。ユニットCには、市内で農業を営んでいるD&D、コボラの中山さん（※3）がメンバーに入っており、「まちなか農業」というポイントで進めることになった。他のユニットは、路地や水路、川や広場などの資源に注目多彩な企画が提案されていた。各ユニットの発表内容は草加市の公式ページ「そうかりノベーションまちづくり」のページにアップされているので興味がある方はぜひどうぞ。

さて、「トレハン」の目的は提案された企画自体ではない（企画は「公園を農地に」「水路を動物園に」などぶつ飛んでいる）。

まず、ふだんは見逃している草加市の問題や資源（コンテンツ）に目を向け、なんとかしよう！なんとかできるという意識を市民に持たせることだと思ふ。そのためのネタが「トレハン」では膨大に提案されていた。

そして、まちづくりができる「人」を見つけて育てること。

「リノベーションまちづくりの肝は人材力なんです。自分でまちの未来を作りたいという意欲をもって実際に行動する人をいかに発掘し繋ぐか」（高橋さん）

今年11月には、「リノベーションスクール@そうか」が開催される。実際に事業を起こそうとしている人を対象としたもので、3日間みっちり行われるとのこと。スクールに先立ち、テーマを絞った「まちの学校」（※4）も開催される。

さて、「そうかりノベーションまちづくり構想」を作るにあたり、行政の各部署の代表、市内の「有識者」（まちの活性化のために活動をしている人々）をメンバーとした「検討委員会」が立ち上げられ



ユニットCメンバーで演劇の練習中



各ユニット発表の後に行われたトークショー。

次氏（※5）。

「検討委員会」を見学させていただいたが、まちづくりを担い成功させてきた人の講演やレクチャーもあり、彼らの行動力とアイデアに魅了された。草加市にそういう人がいれば……。と考えたところで、前号の「そうかまちだより」で取りあげた「3ピズ」（※A）を思い出した。行動力とアイデアを持った人が、「好きなことを仕事にして地元暮らしを楽しむ」こと。これはそのまま「リノベーションまちづくり」にも繋がる活動だ。3ピズでお会いした人が「トレハン」にも多く参加されていた。

すでに「そういう人達」は動き始めているのだ。

※1 「そうかりノベーションまちづくり」

市役所のサイトから各種資料と議事録がダウンロードできる。（サイト内検索で「リノベーション」を検索）。検討委員会は8月24日に一旦終了、11月には「そうかりノベーションまちづくり構想」の企画書と資料が公開されるとのこと（パブリックコメント）。今後はこの構想を実現するための活動が始まる。

※2 「トレジャーハンター」のみなさん

石神夏希さん、青木純さん、大島芳彦さん、瀬川翠さん。「ハンター使い」として嶋田洋平さん。「トレハン」の企画・運営を担当しているのは、嶋田さんが代表を務める『株式会社リノベリング』。

※3 中山拓郎さん

運営しているショップ「チャヴィバルト」は、取れたての野菜だけではなく、全国から取り寄せたこだわりの野菜、美味しくてヘルシーなお総菜・お弁当も提供。ユニットCの昼食はもちろんここで。

※4 「まちの学校」

テーマを絞り、ゲストによる講演・レクチャーが行われるイベント。現時点ではVOL1「カフェからはじまるまちづくり」VOL2「あなたの不動産がまちを変える」を開催予定（8月25日現在）。

※5 清水義次氏

建築・都市・地域再生プロデューサー。株式会社アフタヌーンソサエティの代表取締役。

草加市の 2016 年 4 月～ 2016 年 7 月

月	日	イベント名
3	3/22 ～ 4/10	札場河岸公園内の桜並木ライトアップ
4	2	「パリポリくんバス」開通式／草加駅西口駅前広場リニューアル 合同式典
	2	さくら祭り「船上金婚式」(葛西用水)
	3	草加松原 和舟からお花見 (綾瀬川左岸広場第 2 ラグーン)
	10	春の茶会 (草加市文化会館)
	10	SOKA2016 草加松原熱闘女子 BOXING (草加市文化会館)
	15 ～ 5/15	端午の節句 草加宿つるし飾り展 (歴史民俗資料館)
	29	そうか公園まつり／フリーマーケット (そうか公園)
	29	春の子どもフェスタ (綾瀬川左岸広場)
5	5	端午の節句を楽しむ野だて (歴史民俗資料館)
	8	クラシック音楽ジュニアコンクール (草加市文化会館)
	8	わたしたちの月 3 万円ビジネス～好きなことをビジネスに～トークショー (体験講座) (高砂コミュニティセンター集会室)
	14 ～ 29	草加 Welcome Festival 2016 (草加駅東口周辺商店街)
	15	健康づくりウオーキング大会 (市役所第 2 駐車場出発)
	16	芭蕉像・曾良像お身拭い (おせん公園 (曾良像)、札場河岸公園 (芭蕉翁像))
	28	草加さわやかさん委嘱式及びお披露目会
	21	淡路人形浄瑠璃 草加公演 2016 (草加市文化会館ホール)
	21 ～ 22	昭和村春の体験ツアー (昭和温泉しらかば荘宿泊)
	22	草加 Welcome Festival 2016 スペシャルデイ (草加駅東口前ロータリー周辺、マルイ裏)
	29	そうか環境とくらしフェア 2016 (草加市中央公民館)
	29	和舟の乗船体験 (綾瀬川第 2 ラグーン)
	30	第 113 回 草加落語会 (草加市中央公民館ホール)
6	4	昭和村 春の味覚フェア & 昭和村田舎の野菜便 (カーソンプラザ (草加駅東口駅前広場))
	5	草加都市農業フェア (草加中央防災広場)
	11	青少年の主張大会 (草加市中央公民館)
	12	和舟の乗船体験 (綾瀬川第 2 ラグーン)
	12	第 13 回 国際交流フェスティバル 2016 草加国際村一番地 (獨協大学)
	15	歩いて健康! 草加人! エンジョイ草加ウォーキング (外かんコース)
	25、26	まちのトレジャーハンティング@そうか (草加市立草加小学校体育館)
	25 ～ 7/8	ミニ企画「七夕かざり」(歴史民俗資料館)
	26	第 7 回ソウカパインオペラコンサート「伯爵家令嬢マリツァ」(草加市文化会館ホール)
	26	平成 28 年度 第 38 回 ダンス&新体操フェスティバル (草加市スポーツ健康都市記念体育館)
7	2・3	浅間神社例大祭
	2	平成 28 年度 障がい者スポーツフェスタ (草加市スポーツ健康都市記念体育館)
	3	三遊亭円楽・林家たい平 二人会 (草加市文化会館ホール)
	3	草加朝顔市 (草加松原遊歩道 (百代橋南側))
	3	草加松原夢祭り (草加松原遊歩道)
	10	第 31 回トランポリンフェスティバル (草加市民体育館)
	16・17	八幡神社祭礼
	17	第 29 回草加市長杯弓道大会 (草加市スポーツ健康都市記念体育館弓道場)
	21 ～ 8/31	パリポリくんバスでめぐるスタンプラリー
	23、24	「草加ふささら」草加駅前よさこいサンパフェスティバル 2016 (草加駅西口周辺)
	23	昭和村「からむし織の里フェア」日帰りバスツアー (福島県昭和村からむし織の里ほか)
	29 ～ 8/4	県展作品展 (草加市文化会館)
	30	交流サマーフェスティバル 世代間の交流を楽しもう (市民交流活動センター)
	30	夏休み中央図書館人形劇「南の島のハメハメハ大王」「はらぺこあむし」ほか (中央図書館)
	31	市民体育祭バドミントン大会 (記念体育館)

さくら祭り「船上金婚式」(4 月 2 日)

毎年葛西用水沿いで開催される「草加さくら祭り」。メインイベントの 1 つ「船上金婚式」を初めて見る事ができた。満開の桜の下、川面に映る桜の上を、金婚式を迎えた夫婦を乗せた和舟がゆっくり動いていく。ある舟を追いかけて岸を移動していたら、乗船していた夫婦が、岸に向かって手を振っているのに遭遇。その先には見に来ただろうお子さん(たぶんお孫さんだろう)。私もカメラを片手に手を振ったら振り返ってくれた。派手じゃないけれど、素敵なイベントだ。



草加 Welcome Festival (5 月 14 日～ 29 日)

これから草加市に住む人に、地元を知って快適に過ごしてもらおうというのがコンセプトのイベント。期間中草加駅東口から旧道にかけての商店街で、学生証・参加店クレジットカード・そう☆カードを見せると参加店舗でさまざまなサービスが受けられた。スペシャルデイと銘打った 22 日には、東口駅前に露店が並び、カーソンプラザではライブ等のパフォーマンスを実施。1 日駅長としてミス獨協大学が登場して花を添えた。同日には「一番通り商店街まつり」「めぐりのマルシェ」も開催。ちなみにその日、「草生人」も出店してバックナンバーの配布とグッズ販売をしていたのだが、「販売」の難しさを知った 1 日になった。



朝顔市／草加松原夢祭り (7 月 3 日)

松原遊歩道で開催された「朝顔市」(今年は第 34 回)。草加産の朝顔が一鉢 1500 円で販売される。今年度選ばれた「草加さわやかさん」デビューのイベントでもあり、売り場にはごつい一眼レフカメラを携えたアマチュアカメラマンが大勢いてなかなか目立っていた。地場野菜や花の販売もある。特に枝豆販売は知られていて、用意した数は 1 時間ほどで売り切れたそう。

この日の夜には今年で 2 回目となる「草加松原夢祭り」が開催された。草加松原のライトアップとイベント「リアル謎解きゲーム」。飲食の露店は左岸広場に並んでいた。謎解きゲームのクイズはけっこう凝っていて、ブースは人で賑わっていた。

しかし、点灯式が明るい内に行われるのはなんとかならないのだろうか……。



月々想々 編集より

今回の特集「草加とアート」はいかがでしたでしょうか。「音楽都市宣言」をしている草加市ですが、実は美術もけっこう注目すべきところがあるのです。

毎年10月にアコホールで開催される草加市美術展には、市民が創作した300点もの作品が展示されています。すし、国指定の名勝となった「草加松原」の起点には「松尾芭蕉翁像」があり、草加駅東口には「おせんさん」と「アコちゃん」が佇んでいます。

この、松尾芭蕉とおせんさん、アコちゃんの像を制作されたのが、彫刻家の麦倉忠彦さんです。そして、画家の鈴木喜美子さん、陶芸家の宮地陶博さん、人形師の野崎芳寿さんと、今回の特集を通じて、全国区でも著名なアーティストの方々にお逢いし、その最高の才能と魅力に触れることができました。とても貴重な体験でした。

実は、アート特集は以前から企画には上がっていました。なかなか実現せず、しばらくそのままになっていた。しかし、今年8月に今関恒夫さんとの出会いがあり、それをきっかけに、企画が具体化しました。今関さんは美術関係の出版社で勤務していた方で、草加の美術事情に通じており、麦倉忠彦さんと加藤威さんをご紹介してくださるなど、いろいろご助力をいただきました。今関さん、どうもありがとうございました。この場を借りて、深く感謝いたします。

さて、特集では、草加市内のどこにどんな作品や美術施設があるか、おしるした「アートマップ」を作ってみました(わかった範囲ですが)。これを片手にアート散歩などいかがでしょうか。街がもっと美しくなり、心と暮らしが豊かになる。そんなビジョンは、より多くの市民が美術に関心を持つことから実現に近づくような気がします。

草生人 web

<http://www.asymos.com/soseijin/>
「草生人」公式サイト。
「お問い合わせ」、バックナンバーPDFのダウンロード、スタッフブログ更新情報、草生人関連グッズ販売サイトへのリンク等を掲載しています。



「草生人メンバーズ」のご案内

※お申し込みの方には「草生人メンバーズカード」をお送りします※

■郵送会員 (本誌送付)

年間4号分 1,000円 (送料・手数料等)

■サポート会員 (本誌送付+特典)

年間4号分 3,000円 (送料・手数料等含む)

「草生人」制作・運営費の助けとさせていただきます。

※特典: 本誌およびWebサイトでお名前を掲載、絵はがきなどオリジナルグッズプレゼント

■期間

申し込み次号から4号分。

4号目のお届け時に「更新」のお知らせを同封予定です。

■お申し込み・お支払いについて

・「草生人Webサイト」の「お問い合わせ」、もしくは下記メールアドレスより、お名前、送付住所、連絡先(お電話番号、もしくはメールアドレス)をご連絡ください。折り返しこちらから振込先等ご連絡差しあげます。

asymos_info@asymos.com

草生人を
応援して
ください



※お申し込み(更新)順
※「サポート会員第1期」「サポート会員第2期」の皆さまにはすでに「草生人メンバーズ」への更新のお知らせを同封させていただきました。更新の手続きを終了したにもかかわらずお名前が掲載されていないという方は、お手数をおかけして申し訳ありませんが、編集部までお知らせください。

応援ありがとうございます

草生人メンバーズサポート会員の皆さま

戸田直斗 様	松田洋一 様	中沢進 様
大橋欣之 様	安達宜秀 様	伊藤昌幸 様
細川昭二 様	松下成孝 様	林直子 様
山川百合子 様	小宮山龍一 様	矢島民夫 様
正木裕子 様	松本雪久 様	山田敬子 様
杉田和美 様	野村康博 様	畠中優 様
おるがん 様	四津昭夫 様	磯崎直人 様
中島好博 様	藤井剛彦 様	小泉浩伸 様
若山富昭 様	丸野典子 様	北嶋敏久 様
祝原暁 様	荒木梨花 様	染野政夫 様
広瀬隆次 様	梁健二 様	大月和久 様
清水努 様	本多秀康 様	上野恭正 様
金森正夫 様	千田保夫 様	

アンティークショップ&カフェ

おるがん

草加市金明町 665 ☎ 048-942-5323
定休日: 月・火
時計の電池交換いたします。
国産・ブランド・Gショック 500円!

レンタルボックス&カフェ

おるがんモール

手作り品・リサイクル雑貨・趣味で集めたお宝を販売するコーナーを1か月2,500円から、300人が出店中です。
南越谷店: 越谷市南越谷 1-13-7 ハローマート 3F
☎ 048-986-5326
越谷店: 越谷市越ヶ谷 1-1-12 エガワプラザビル 2F
☎ 048-967-1170

chavi peltó
趣のある野菜たち

知からお届け! 特別特産野菜

産地直送野菜 有機野菜

ベジデリ&玄米お弁当

ファーマーズハウス チャヴィペルト
340-0034 埼玉県草加市金明町2338-3
TEL 048-961-7068
www.chavipelto.co.jp

木の音.konon



電力を必要としない
エコロジカルな木箱のスピーカー
<https://minne.com/yosinsky>

草加
大橋工務店



あなたの生活と
企業の繁栄を
アシストします。

代表社員 税理士
長谷部 健一

代表社員 税理士
藤波 篤史

税理士法人 Life & Company Assist

L&C アシスト

〒340-0014 埼玉県草加市住吉 1 丁目 4-12-101
Tel: 048-924-9244 Fax: 048-924-2554 <http://www.townnavi.net/l&c-assist/>
e-mail: hasebe-ken@tkcnf.or.jp



ユウテイさんの食パンを使ったサンドイッチ、水素還元水を使ったおいしい珈琲、「はちのす珈琲」のオリジナル手作りカップで、ゆったりとした時間をぜひどうぞ

林さんが作った
シフォンケーキ
珈琲・紅茶とセットで
550円!
毎週味が違います!

美味珈琲 ツネ
草加市金明町 375-30 ☎ 048-932-1528
営業時間: AM8:30 ~ PM8:00
定休日: 日曜・祭日